

明治實業讀本 卷三

教科書文庫  
4  
810  
44-1909  
2000054289

43336

教科書文庫

4  
810  
44-1909  
20000  
54289

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

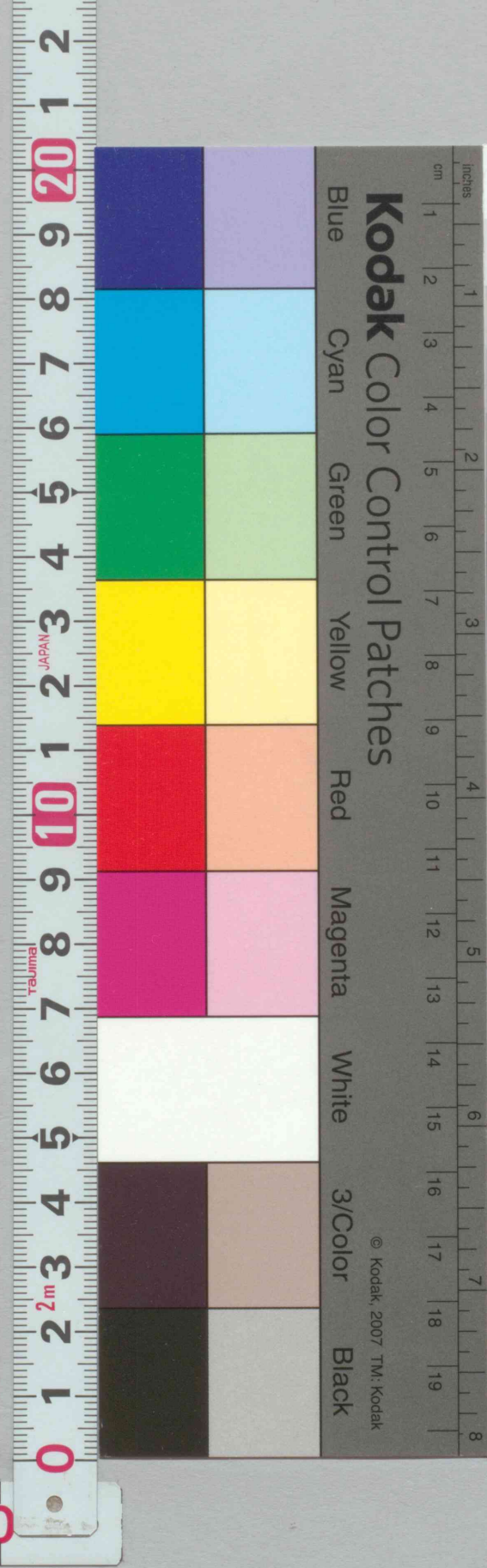


© Kodak, 2007 TM: Kodak

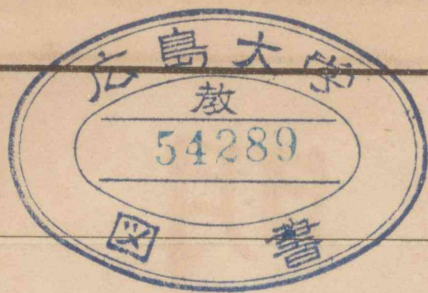
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室  
中央図書館



明治實業讀本 卷の三

目次

一	教育の勅語……………	一
二	漢文句例……………	五
三	人間の目的と職業の選擇……………	六
四	漢文句例……………	一
五	英國の分業……………	二
六	漢文句例……………	一四
七	岩崎彌太郎の傳……………	一五
八	漢文句例……………	一三

目次

375.9  
I221

教科書文庫  
4  
810  
44-1909  
2000054289

文部省  
實業學務局  
泉屋清次郎  
中村康之助  
共著

明治實業讀本

東京 同文館藏版

広島大学図書

2000054289



九 我が國の航海業……………二二三

一〇 漢文句例……………二二七

一一 世界は目前にあり……………二二八

一二 漢文句例……………三三二

一三 仁川港……………三三三

一四 臺灣四大産物(漢文)……………三三六

一五 コロンブスの卵……………三七

一六 鐵(漢文)……………四一

一七 野中兼山の功業……………四二

一八 安藝孝子(漢文)……………四五

一九 カーネギーの青年時代……………四五

二〇 紀州柑園(漢文)……………五一

二一 スエズの運河……………五二

二二 羊罵狼(漢文)……………五六

二三 九重の山水……………五六

二四 宮城(漢文)……………六四

二五 船津翁の碑……………六四

二六 山林(漢文)……………七〇

二七 沙漠の旅……………七一

二八 佐藤信淵(漢文)……………八〇

二九 モセス、ロスチャイルド……………八一

三〇 愛財甚(漢文)……………八六

三一 赤十字社(その一)……………八七

三二 赤十字社(その二)……………九一

三三 特用食物……………九七

三四 少年に寄語す……………一〇四

明治實業讀本 卷の三日次終

明治實業讀本 卷の三

一 教育の勅語

道を知らずして野山を行くものは、たづきも知らぬ森中に、虎狼の毒牙にかゝる。あるべく、羅針盤なくして海原を漕ぎ行くものは、淺瀬に乗り上げ、暗礁に碎かれて、魚腹に葬らるゝこともあるべし。如何なる道にも有らまほしきは、道しるべなり。

人の一生は、旅路に似たり。人事の陸地は、まことの陸地よりも廣く、社會の海原は、まことの海原よりも大なり。深

羅針盤

林・大澤の數知らず。淺瀬・暗礁、到る處に多し。この海に船出し、この陸に旅立てる吾等青年の行くては、誰かはこれが道しるべせん、何物かこれが羅針盤たる。こゝに唯一無二のしるべこそあれ。

かしこくも、千代田の宮に千代かけて、皇國をしるしめず、わが大君、億兆の民をして、處世の誤なからしめんものと、明治二十三年十月三十日を以て、下し給ひし教育の勅語は、これ、即、吾人同胞が、よろづ世かけて守るべく、よるべき道のしるべなり。

いでや、この大御勅語をしるべとして、浮世の險しき山坂も、あらしき波路も、たどりゆかん。謹みて案ずるに、わが大君

億兆

蒼生

蒼生  
民草  
公民  
天徳

勿頸如蘭

は、日の御子として、天に代りて吾等蒼生を愛育し給ふ。いかで、赤心をぬきいでて、忠節を盡さざるべき。兄弟姉妹は、同じ幹より出でたるものなれば、互に相むつびて、枝葉の、いや榮えんことを願ふべく、夫婦は、家の本なれば、互に相和して、家の益、富まんことを圖るべし。朋友は、己と郷を同じうし、ヨク齡を同じうし、或は道を同じうし、志を同じうすれば、コト勿頸如蘭の契あるべきなり。  
恭儉・博愛は、吾等の、必、守るべき徳、修學・習業は、知徳を研磨するに缺くべからざるわざなり。國民の一分に數へられたる上は、カ苟且にも、世務を疎略にすべからざるは、勿論、進んで公益を計らんこそ肝要なれ。

疎略

吾等

安寧秩序

誓約  
折衷

瑞穂の國

憲法・法律は、國家の安寧秩序を保つべきものなれば、忘れても、背くことあるべからず。一旦國家に事あるときは、一身を捧げて、義勇奉公の操を立て、君國を、泰山の安きにおくべし。これらの諸徳は、みな、懇に大御勅語に示させ給へり。これをしるべとして進み行かば、いかに險しき山坂も、いかにあらしき波路も、物のかずにもあらず。

この道を忘るれば、身を亡ぼし、名を汚すべき災害も、相ついで起ることあらん。あはれこの世の陸と海とに、いて立つ吾等、誠を致し、心を盡してこの道をこそ行くべけれ。

世界萬國に比類なき、豊葦原の瑞穂の國に生れ來て、おほ御寶の名をもちて、代々の御門に愛撫せられしは、赤子の慈

母にいつくしまれしが如し。この尊き御國に生れて、かゝるかしこき大君をいただき奉る吾等は、身を粉にし、骨を碎きても、御國のために盡すべきなり。いてや、吾等が道のしるべと下したまへる大御勅語を、朝夕に仰ぎてこれを拜讀し、晝夜に、俯してこれを思ひ、以て、聖恩の萬が一に報い、且は、人生の旅路も安らげくわたり過ぎなんことを、誠心かけて誓はんとおもふにこそ。 (作文教範)

二 漢文句例

富士山、高琵琶湖、闊  
身體強健品行端正

二 漢文句例

梅花開黃鳥啼。

承和十二年、菅原道眞生。

廣瀬中佐戰死。

秋高馬肥。

金屋  
紅吹風  
ゆづりかえ  
風

春木  
夏火  
秋金  
冬水

### 三 人間の目的と職業の選擇

凡そ人は活動をその本分とす。食はんがために生れたるにあらず、眠り又は遊ばんがために生れたるにもあらず、活動せんがために生れたるなり。食ふは滋養のためなり、眠るは休養のためなり、遊ぶは保養のためなり。要するに心と體とを壯健ならしめて、活動を自在ならしめんと欲す

活動

保養

るのみ。

活動とは業務の總稱なり。地を耕すも活動なり、製造業に従事するも活動なり、學理を研究するも活動なり、惡人の行爲も活動なれば、善人の所業も活動なり、活動の種類は千差萬別なり。

人と生れては、賢愚の別なく、何事かの活動を爲さざるものなし。只、その心だてに高卑の差あるが故に、自らその着眼に高卑の別を生じ、延いてその目的たる活動にも高卑を生ず。私利を營むをのみ目的とするものあれば、國利公益を圖ることを一生の志となすものあり。楠木正成も、足利尊氏も、共に武將として活動したりき。されど、その目的に

三

人間の目的と職業の選擇

七

雲泥

は雲泥の相違ありき。農夫商人の名高きは古今に夥し、されど、多助尊徳の心がけをその志となすものは、多からざるなり。

然らば、如何にせば高尚なる活動を爲すを得べきか。答へて曰く、第一には自分勝手一方の慾心を去るべし。第二には常に他人の心中を思ひやりて、及ぶ限り深切を盡さんの心がけを磨くべし。第三には國利公益を最終の目的として事業に志し、おのれが生れつきの長所に向つて、その一生の全力を傾注すべきなり。是れ、實に、人たるもの、本務にして、亦、その成功の秘訣なり。これを成就せんと欲せば、先づ第一におのれが生れつき

傾注

成就

の長所と短所とを知らざるべからず。次には、その長所に應じて職業を選ぶこと、肝要なり。

人の生れつきの同じからざるは、その面の如し。人毎に生得の長所短所あり。或能力は教育を俟たずして發達す。之をその人の天稟といふ。生れながらにして筋力の秀でたるもあれば、智力の取りわけて優れたるもあり。例へば畫才はウエストの天才なりき。彼は習はずして能く畫きき。かゝる例は音樂者にも、學者にも、工人にもあり。

天稟

佛のナポレオンは「能はず」といふ語をしりぞくべしといへり。又「精神一到せば何事か成らざらん」といふ古語あり。げにや正當の手段を整へ、長き年月を費し、多くの艱難に堪



忍耐

へ、たふれて後ち止むの決心を以て事に當らば、天下全く成し難きことは、蓋、稀ならん。而も是れ、甚、不利益なる勞苦ならずや。同じ準備と、同じ年月と、同じ心と、同じ忍耐とを、その生れつきの長所に向つて注がば如何。その功、正に幾倍すべきにあらずや。

堀保己コホキ一の才と根氣とを以てしても、天稟に適せざれば如何ともしがたし。保己ホキ一は音曲・鍼治チシ等におのゝ四年を費して、尙ほ何の修め得たる所もなかりき。勞多くして功少かりしなり。ウエスト・元信の如きは天稟の畫工なれど、若し勉強せば相應の商人・工匠となり得べし。然れども到底グールド・カーネギーの如き大商人とはなるべからず、

適否

飛彈の工匠の如き名人とはなるべからず。その故他なし、生得の長所に背けばなり。

職業を定むるは、運を定むるに等し。一生の浮沈ウツシは、多く職業の適否トクヒに因る。人はその職業を選ばざるべからず。

四 漢文句例

勝安房、幕臣也。

野中兼山、土佐人也。

日本三景者、陸前之松島、丹後之天橋立、安藝之嚴島也。

北海道之海産者、豐富也。

天既晴草履可也。

### 五 英國の分業

歐洲各國の製造工場を巡見し、之を比較して、英國に分業の著しく發達せるを見るに及んで、大に工業の進歩せるに感服したり。日本にていへば、工場の大なるに従ひ、益多く諸種の器械を製作することなれども、英國にては偶々専門の工業に附屬せる、二三種の器械を造るものあるの外、決して別種類の器械を製作することなし。例へば製鐵業に就ても蒸氣機關、荷揚機、瓦斯管等を始め、小は鍋釜鐵槌等に至るまで、各製造工場を異にし、同じ鐵板にても、屋根板を造る

ものは橋板を造らず、機織器械にも、木棉と麻とは別々なり。されば、造船所に於ては船體を造るのみにて、蒸氣機關は他の工場より供給を仰ぐべし。只、二種以上を製作するは、彼のアームストロング製砲會社に於て、銃丸を造るが如き類に過ぎず。

この分業の點に於ては、獨佛の諸國も英國に及ばず。從つて獨佛には英國よりも規模の大なる工場多しと雖、これ決して事業の大なるがために非ず。自己の工場にて使用する各種の器械を併せて製作するがため、勢、規模を擴張する必要あるが故なり。且、また、英國には、株式を以て組織したるもの少く、多くは自己の資産を以て、獨立の業務を營む

朦朧

ものにして、その他は合名會社の組織よりなるもの多し。以て英國工業家の資産に富むを知るべし。一たび倫敦を去つて、ミッドランド地方に旅行を試むるときは、恰も竈より炊煙の立つが如く、戸々の煙突より黒煙の登るを見るべく、全市朦朧モウロウとして、雨中に山影を望むが如し。英國の盛大は倫敦に於て見るべからず。工業地方に到りて、始めて是を知るべきなり。(鎌田榮吉)

六 漢文句例

修學習業。

讀書作文。

摘桑耕田。

廣公益開世務。

東京在武藏國。

極口罵之。

建家屋架橋梁。

七 岩崎彌太郎の傳

岩崎彌太郎、名は寛、東山と號す。天保五年十二月、土佐國安藝郡井の口村に生る。父を彌二郎といひ、世々、郷の名族たり。七歳の時、はじめて、母方の親戚なる小野氏に就きて學を受け、後、また、小牧周平の門に入りたり。十二歳の頃よ

謁見

り詩文を學びしが、十四歳の時、藩主養徳公に召され、詩を賦して大にその奇才を稱せられ、金若干を賜はれりといふ。藩制によれば、學生にして謁見をゆるさるゝだに、非常の名譽なるに、まして恩賞にあづかれるなど、人皆、以て異數とせり。ほどなく高知に赴き、岡本疊浦の門に入り、ますゝ學を修め、その業大に進む。

誣告

安政元年、江戸に出でて、安積良齋の門に遊ぶ、この時二十一歳。あくる年、父、村吏と諍ひ、その誣告するところとなりて、禍に罹れり。氏この報を得るや、即日江戸を發し、晝夜急行して山野に露宿し、僅に十三日を以て郷に達す。當時、道路不便、藩の急報を齎し、早打にて行くも、なほ十日を費し、

連絡

に、氏は徒歩してかくも速に歸郷せしかば、人皆、その孝心の深きを嘆賞せり。氏、郷に歸りて直に郡奉行の廳に至り、父の冤を訴ふ。されど、奉行もひそかに村吏に連絡したりしかば、その訴を許さず。氏、廳門に到り、その柱を削り、官以賄賂成獄、因愛憎決訟と大書す。奉行これを見て大に怒り、忽ち删除す。氏、また外壁に大書すること前の如し。奉行、氏を捕へて、彌太郎その方はよもやこを書せざるべしと糾彈す。氏、黙して答へず、奉行再び問ふ。氏、意を決して、否、余の書せしものなりと答ふ。こゝに罪にあてられて、禁足を命ぜられたり。これより、聲名、縉紳、學士の間、高く、最、吉田東陽の知遇を受け、後藤象二郎、坂本龍馬等と交を結ぶ。東陽

糾彈

知遇

碩儒

は土佐の碩儒にして、また人傑を以て重んぜられし人なり。安政五年、藩命をうけて長崎に赴き、外國の形勢事情を探り、慶應二年かへりきて藩に仕へ、開成館に入りて勸學事務を掌りぬ。その後、また藩命を以て長崎に赴き、通商事務に任ず。この時、氏大に思ふ所あり。船をよそひて朝鮮國蔚陵島に航し、標木を建設して、その表に「大日本國土佐藩の命を奉じ、岩崎彌太郎、本島を發見す」としるせり。既にして藩に歸り、少參事に任ぜられ、大阪留守居となりて會計事務を掌れり。

蔚陵島

保管

當時、藩の船多く費用を要し、殆ど支持する能はず。よりにてまた、船舶保管の事を託せられたり。氏即、九十九商會を

幹旋

起し、運漕の業を開く。こは藩船を以て通商に用ひ、事ある時は、藩に歸して軍事にあつる法なり。この時、列藩騷亂、軍國多事、土佐藩また財用に乏しかりしが、君大に幹旋して、會計を整へ、通商を開きしのみならず、廢藩置縣の際は、商會を解きてその船舶を還納し、その収益數萬金を獻納せり。かくて更にその船舶を縣廳より購入し、大阪において汽船運漕の業をはじめむ。これ實に日本郵船會社の起原なり。

獻納

明治七年、佐賀の亂の起るや、政府の命をうけて戦地回漕に従事せり。かくて、ほどなく臺灣の役起れり。こゝに政府は、新に汽船數艘を購入し、これを會社に託して、戦地回漕に従事せしむ。役やみて後、その汽船を用ひて、上海、及、内海

衰微

諸港の航路を開きぬ。これよりさき、郵船會社と競争するところありしが、該社漸く衰微せり。こゝにまた、新に上海航路を開き、大に太平洋汽船會社と競争するに至れり。さるにいくばくならずして、その汽船會社の船舶を購入し、遂に競争を杜絶せり。その頃、たまく郵便汽船會社倒れぬ。されば、政府はその船舶を擧げて氏に託し、郵便運漕の事業を悉く委託せられたり。これ、郵便汽船三菱會社の名稱の起れる所以なり。

杜絶

壓倒

明治九年、英國ビィオー會社、横濱・上海間に於て新に航路を開き、大に競争せしが、また彼を壓倒するにいたれり。明治十年、西南の役起るに及びて、上海線を除くの外、各路の船

舶を擧げて、運漕に従事せり。されば、鎮定の後、その功によりて、勳四等に叙せられぬ。かくて、翌年にいたり、北海道諸港の航路を開き、あくる年、さらに香港の航路をはじめむ。かくの如く、氏はわが國の航路を擴張するを以ておのれの務とし、敢て他事に及ぶことなし。

豪宕活達

氏、人となり豪宕活達、一事を擧ぐれば、則、一事を企て、艱難にあひて、益、勇往の氣を加へたり。

懇篤

ことに情誼に厚く、父母に孝にして、兄弟に友に、親戚朋友はもとより、他人に接して忠實懇篤を旨とせり。またつとめて節儉を行ひ、いさゝかの費途も輕んずることなし。而して、人を救ひ世を益する事にいたりては、萬金を擲ちて少

救恤

しも惜むことなく、學校を設け、文庫を開き、教育の資を献じ、貧民を救恤せしこと、實にその幾回なるを知らざるなり。

十七年の夏、病に罹り、漸く重くなりて、十八年二月六日、從五位に敍せられ、あくる日、茅場町なる本邸に卒す。年五十二。病急なる時、醫師、看護の人々、葦を繞りて坐せしが、氏は、忽、大聲を發して、「東洋の男兒」と叫びたり。人々皆驚きしに、猶聲を勵まして、「東洋の男兒、平生計畫して、胸に蓄ふるところのものすくなからず。これを實際に施設すること、未だ十の二三にいたらずして、病のために奪はる。事既にこゝに至れり、かなしいかな」と高く呼びて眼を閉ぢたり。

施設

(落合直文)

### 八 漢文句例

耕稼

亞刺比亞有一豪富、曰阿兒模刺的。

山水明媚、爲全國之冠。

乘汽車、發新橋、經名古屋、京都、大阪等、達神戶。

品海之水、總房之山、皆來入指顧問。

西國有一農夫、平生力耕稼。

### 九 我國の航海業

我が帝國は、島國なるにより、その航海業も早くより開け、神代の頃、既に韓國に渡りし事ありとぞ。後、神功皇后征韓

頻繁

の役數多の船艦を將ゐて、彼の國に渡り給ひしことあれば、その術の進み居たりしも明かなり。是より三韓、及、支那との交通頻繁となり、航海の業、亦、從つて進歩するに至れり。降りて足利氏の時代、しばらく疎かりし明國との交通開け、稍、盛ならんとし、加ふるに豊臣秀吉の時、益、進歩の著しきを見たりき。そは秀吉が朝鮮征伐の時にして、彼は數千の兵艦を造らしめ、中にも日本丸などいふ巨大の船を造り、幾十萬の兵馬を彼の地へ送り出ししのみならず、航海の法律を制定し、盛に海外貿易の道を奨励せしより、航海の業一般に發達し、支那、朝鮮の二國は勿論、印度、南洋諸島までも航路を開くに至れり。

制定

御朱印船

國賓

豊臣氏に次いで、家康、徳川幕府を開くや、その初めにあたり、和蘭陀の船長を召し、これを好遇せしを以て、呂宋、安南、柬埔寨の人々も來り、我が國人も幕府の認印を得て、これを船印となし、御朱印船と稱して盛に貿易をなすものありき。仙臺侯伊達政宗が、その臣、支倉六右衛門を羅馬に遣はし、甲斐の人、山田長政が暹羅に渡り、國賓をもて遇せられ、日本町を建てたる等、國威を輝かし、この頃の事なり。これらによつて考ふれば、その進歩の著しき、決して西洋諸國に劣ることあらざりしならむ。

然るに、三代將軍家光の時、切支丹宗門の弊、鮮からずとて、その侵入を嚴禁せしにつれ、五百石以上二本檣の船は、兵用



破碎

と商用とを問はず、これが製作を禁じ、在來のものは悉くこれを破碎するに至る。乃ち航海の業、一頓挫し、爾來殆ど二百年、毫も振はざりき。然るに、この間、歐洲諸國、大勢正に一變し、北米合衆國も新に獨立し、列國皆、眼を東洋に注ぐに至りぬ。

斯業

かくて將軍家重の頃より、露西亞の軍艦、屢來りて我が北邊を侵し、その他、諸國の船艦來り舶するものあるより、幕府遽に家光の禁を解き、且、諸藩に命じ、西洋の製に倣ひて大艦を作らしめ、又、和蘭陀人に託して數艘の軍艦を購入し、大に航海の業を習はしむ。よりて、斯業また再振するの端を開きぬ。

擴張

明治維新の後、海外の交通漸く頻繁なるに至り、帝國郵便汽船會社先づ起る。次て岩崎彌太郎の三菱會社立ち、後、共同運輸會社起りしが、明治十八年に至り、此二社合併して、今の日本郵船會社となり、東京を中心として、内海は勿論、支那、朝鮮、東部西比利亞の諸港より、歐洲、米國、濠洲の諸國に至るまで、縦横に航路を擴張せり。此の他、大阪を中心として、中國、四國、九州地方の航路を占むる大阪商船會社をはじめ、各地に數多の汽船會社のあるありて、海上の往來、亦、陸地と等しく便なるに至れり。

一〇 漢文句例

楠正成戰死、尊氏送首河内。

詰旦輕裝取路東寺南。

紅日如燒、即避暑海濱。

金貴於銀。

我驅逐艇隊、襲露國艦隊、旅順口外。

明治五年、詔全國募兵、頒布徵兵令于天下。

一一 世界は目前にあり

三河は古來有名なる木綿の產地なり。されども支那印度亞米利加合衆國より精良にして價廉き綿の日本に輸入し來るを以て、今や三河にては綿を植うるもの殆どなきに

西瓜

縦

骨粉

いたれり。山陽鐵道筋及四國の島にては日本種の西瓜は漸く見えず、大概は西洋種となれり。これ西洋種の西瓜は、日本種よりも砂糖分も多く、味も好きを以てなり。眞桑瓜も亦これを植うるもの漸く少なく、西洋種の梨瓜と云ふもの之に代るに至れり。梨瓜は眞桑瓜と同じ種類なれども、砂糖分も多く、味も好きを以てなり。日本の材木は、其價高きを以て、北亞米利加の太平洋岸より、頻に材木を輸入し來るなり。製紙の一原料なる樅の木屑は、北亞米利加のカナダ、又は歐羅巴の北端なるスウェーデン・ノルウェーより輸入し來るなり。肥料なる骨粉は、南半球のオーストラリアより、鳥糞は、印度洋中の島より、硝石は、南亞米利加の南端なる

摺附木

チレより輸入し來るなり。菓子に用ふる麥粉、及び鹽、鮭は、亞米利加合衆國より輸入し、牛肉は、鹽漬として、オーストラリアより輸入し來るなり。

摺附木、即、マッチは、其名の英吉利語なるが如く、從來、日本には無かりしものなり。されども、日本にて製造するもの、漸く精良となり、價廉くなるや、日本のマッチは、東洋、南洋、及び歐羅巴の一部にも輸出し、歐羅巴に於けるマッチ製造場は、これがために倒るゝもの、數多くなるに至れり。手巾、即、ハンケチは、その名の英吉利語より訛りたるが如く、從來、日本には無かりしものなり。されども、日本の女子は、巧妙に、且、價廉く、其縁を縫ふを以て、絹ハンケチは、歐羅巴、亞米利加、オーストラリアなどに、甚だ多く輸出せらるゝに至れり。

蝙蝠傘

器のピアノ・オルガンは、其名の西洋語なるが如く、從來、日本には無かりしものなり。されども、日本にて製造するもの、漸く精良となり、價廉くなるや、歐羅巴、亞米利加より需用し來るなり。麥稈眞田の編方は、西洋より傳へたるものなり。されども、日本にて編むもの甚だ精良に、且、價廉きを以て、歐羅巴、亞米利加、オーストラリアに甚だ多く輸出するなり。

蝙蝠傘及び麥酒、即ちビールも、共に從來、日本には無かりしものなり。されども、今や日本にて製造するもの、多く東洋及び南洋に輸出するに至れり。

古來、日本に固有せるものゝ、西洋に壓倒せられたるもの

あり、されども、西洋より傳來せしものと雖も、日本人の、西洋人を、彼地に於てすら、壓倒せしものあり。即、露西亞領シベリアの東部に於ける、寫眞師、時計直しは、大概日本人なり。かくの如く、世界は共通となり、隣家の如くなれり。由來、膨脹の氣風に富める我等大和民族は、此際、西洋、さては、南洋の遠き隣家を音づれざるべからず。(志賀重昂)

一二 漢文句例

病從口入、禍從口出。

遇意外之事、不動聲色。

源義經、墜所執弓于波上。

井上蘭臺、閉戸讀書。有客至、則自答以不在。客以為戲。

蘭臺勵聲曰、主人自答如此。何偽之有。讀書不輟。(原善)

一三 仁川港

仁川港には、日本居留地、各國居留地、支那居留地、三區の居留地あり。海岸の斗出せる處に海關ありて、その上の高丘に、洋風、及支那風の家屋見ゆ。これ支那居留地なり。これと相接するを、日本居留地となす。家屋櫛比して、後高く前低く、半は峻坂の上にある。その海の方は、土地平坦にして、港内の形勝を占め、運輸往來、極めて便利なり。我が居留地の後を擁し、左を扼する所を、各國居留地となす。然れども、

斗出

櫛比

純然

歐米人の在留するものは、甚僅少なるを以て、日本人は、そこに土地を買ひ、又は借りて居住し、市街は純然たる日本風をなせり。

この區を出づれば朝鮮町にして、その入口に支那人の商店あり。朝鮮人の家屋は、清潔とはいひがたけれども、やゝ體裁をなし、釜山、及元山などの朝鮮町とは、同日の論にあらず。蓋、居留地の盛大となるにつれて、諸方より新に移住し來りて、一市街をなし、故ならん。居留地の東に當り、丘陵の海に臨むものあり。これを日本公園となす。園の中央に大神宮あり。眺望、頗佳に、かの有名なる漢江、支那居留地の後を繞り、逶迤して海に入るさま、手にとるやうなり。

逶迤

揚卸

仁川港と相對し、喚ば、應へんとするは、月尾島なり。周圍一里に過ぎず。これと相並びて海上に立つは、小月尾島なり。仁川の良港たるは、實にこの二島あるを以てなり。この近傍は海潮の高低甚しきを以て、満潮の時には一面蒼海となり、千噸以上の大船も、月尾島を繞り、近く海關の前に碇泊するを得べけれど、退潮に及べば、江洲處々に出でて、その間に、一帯の漢江を現するが故に、大船は遠く小月尾島の外に止り、舢舨船によりて屈曲せる水流を遡り、荷物、船客の揚卸をなさざるべからず。

日本居留地の前に當りて、一小嶼あり。樹木鬱蒼として大に港内の風致を添ふ。潮來れば、蒼波渺茫として、大船も

渺茫

其間を往來すべく、潮退けば平沙遠く連り、歩して渉ることを得べし。その潮水の進退するさま、まことに迅速にして、恰も海嘯の去來に異らず。これ他の地方において稀に見る所なり。(末廣重恭)

一四 臺灣四大産物

臺灣島在琉球西南。氣候炎熱、不知<sub>レ</sub>沍寒。然<sub>レ</sub>夏月海風送<sub>レ</sub>涼、洗<sub>レ</sub>熱散<sub>レ</sub>炎、無<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>太難<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>者。土地肥沃、草木蕃茂、最適<sub>レ</sub>茶・甘蔗。山中多産樟腦、又出石炭。此四品實爲本島之四大産物。(臺灣地誌)

一五 コロンブスの卵

歡呼

盛宴

コロンブスの、亞米利加發見の偉業を終へて歸り來るや、西班牙全國は歡呼して彼を迎へ、彼の盛名はまことに天に冲せむばかりなりき。その折のことなり。僧正メンドザといへる人、コロンブスのために一大盛宴を張りて、多くの貴紳を招待せり。席定るや、僧正は、やをら起ちて、辭を極めてその偉業を賞賛し、高く盃を捧げてコロンブスの壽をなせり。招かれたる宮廷の貴族たちは、一外國人たるコロンブスが頻に賞揚せらるゝをば、何となくおもしろからず思ひ居たりけるが、今まのあたりかく賞賛せらるゝを見て、まことにやすからぬことに思ひたりき。かゝるほどに、式部

公開

長なる一人の貴族は、遂に口を開きぬ。「われはおもふ。新  
 陸地の發見といふことよ、それは、さまでの難事にはあらざる  
 べし。大洋は航海者に向ひて、その航路を公開せり。その  
 いづれに向はむは航海者の自由にあらずや。彼等もし望  
 まば、何人も容易に、そのいはゆる新陸地への航路に上り得  
 べきを。おゝわが西班牙の航海者は、誰とて、かばかりのこ  
 と企て得ざるものあらむや」といひつゝ、彼は座中を見渡せ  
 り。「わがいはむとせしところよ」といはぬばかりに、貴族等  
 は直に聲を合せて、さなり、さなり」と同じつゝ、はては「おゝわ  
 れらだにも、よくこれをなし遂げ得む」といひ放ちて、さて、  
 どつとうち笑ひぬ。

閣下

黙して聽き居たりしコロンブスは、この時、徐に口を開い  
 て、「わが得てし成功につきて、かばかり大なる名譽を得むこ  
 とは、わが夢にもおもひ到らざりしところなり。われはた  
 だ神の與へたまへる、わが幸運をあり難しと感ずるのみ。  
 さても閣下たちよ、世には何にてもなきやうに見ゆること  
 の、さてわれみづからには爲し得られて、人のこれをなせる  
 を待ちて、はじめて然か感ずることの多きなるぞや。われ、  
 今、こゝに、閣下たちに願ふべきことあり。幸に閣下たちの  
 そを許されむことを乞ふとて、一つの鶏卵を取りいでて、こ  
 を指頭に立て、見給へや」と乞ひぬ。

鶏卵

式部長

式部長をはじめ、一座の貴族たち、こはおもしろきことな

不可能

り、いでわれこそ」とて、かはるがはる試みつれど、遂に立ておほするものはなかりき。「こはなし得べき事かは」と、試みつかれて、一同は叫べり。「御身は不可能のことをこそ望ませ給ふぞ」と云へり。

「されど閣下たちよ、閣下たちは又させむとならば、そはわれらも能くせしならむをといはせ給はむに」とコロンブスはうち笑ひつゝ、さてその卵を取りて、軽くその一端をテーブルにてうちて、かくて、その少しくくほみたるをば、わが指頭にあて、正しく直立せしめてけり。「然り、かくの如きは何人もよくこれをなし得」と、貴族等は叫びたりき。

これより後、人の成し遂げたる事業を見て、「われまたよくこを成し遂げたらむに」などいふものあるときは、「それはコロンブスの卵よ」といひて互に相戒めけりとかや。

(實業學校讀書科教本)

一六 鐵

製鍊

鐵、在金屬中、日用最不可缺者也。鍋釜、小刀、菜刀之類、皆以鐵製之。至汽車、汽船、軍艦、砲銃、莫不資於鐵焉。我邦多產鐵、陸前、陸中、安藝、備後、石見、伯耆、出雲、諸國、所出最爲良質。然而製鍊之法未備、故不得不購之於海外。其年年所費貲財、不亦大乎。(重野安繹)



一七 野中兼山の功業

土佐國の東南の方に、長く突き出でたる室戸御崎の海岸は、大なる巖、そばだちて、波風よくべき處もなければ、往來する大小の舟ども、年ごとに底の藻屑となり果つるも少からざりき。野中兼山、一年、君命を蒙りてこの邊に港つくらんとて見廻りけるに、並び立てるこゝしき岩のあはひに、舟五つ六つ容れ得べきほどの入江ありき。兼山、乃、この邊の海に馴れたる人々を集めて、ところの狀を問ひしに、年老いたる一人のいふやう、この入江の口なる水底に、劔たてたらんやうなる鋭き巖あり。そが上に大海より寄せくる浪烈しくあたりて、波風のたちるも量られねば、港つくらんことは

藻屑

父 兼山

兼山

止

字 良

通稱

傳 石衛

いかゞあらんとて、首傾けたり。

兼山やゝしばし考へたりしが、心に悟れる事やありけん。いそぎ土地の狀を畫きて、許を江戸に仰ぎ、數多の人を率ゐて、工事に取りかゝりぬ。先づ多くの石を運び來て、かの水底なる巖の周りに大なる堤をつき回らして、中なる水を汲み干し、さて大なる鐵槌もて、かのすさまじき巖を打ち碎き、さて後にきづきし堤を取り捨てければ、いとも大なる便りよき港となりて、往來の舟人、永く風浪の難にかゝらぬ事はなれりとぞ。

鐵槌

つと

兼山また江戸にありし時は、高知なる友の許に書して、土佐國は産物いと多かれど、蛤のみあらねば、こたびのつとに



慘狀

するものは、到底富豪たるの資格なし。極貧極苦に身を曝し、死活を争ふの窮境に立ち、殘酷さながら狼の如き貧乏に追はれて、一切家庭の和樂を咬み破られ、一家離散の慘狀に陥り、如何にもして、この狼を追ひ拂はんとの大決心を奮ひ起す者にあらざれば、到底富豪とはなり得べからず。人間此境に臨んで、始めてこの全能力を發揮し得べきなりと。

暗憎

實にカーネギーの幼年時代は、暗憎極れるものなりき。翁が十一歳の時、一夜遅く父は外より歸り來りしが、顔には血の色もなく、ぐたりと椅子に懸けながら、その妻に向ひていふやう、「今日も一日驅け廻りたれど、仕事はなかりき。偶、あれば、到底勞力にも引き合はず、これにては、所詮一家も支

悲哀痛傷

へ難ければ、子供とも相談の上、何とか始末せざるべからずと。この様子を目撃したるアンダーは、子供心にも悲哀痛傷の情に堪へず。この時より、命限り根限り働きて、貧の神をわが家の戸口より逐ひ拂はんと決心したり。

カーネギーの家は、機屋にして手織機數多を据ゑて、相應に營業せしが、近年機織器の發明の爲に、追々衰微の悲運に陥り、一家四人飢餓に迫りて、遂に身代を疊み、故郷を後に、天涯茫茫たる米國に航せり。かくて、僅なる知邊を便りにベシシルバニア州のピッツバーグに落著き、アンダーは、翌秋より一週若干の給料にて、同處の木綿工場に雇はれたり。仕事は絲捲にて、朝は日出前より夜は日歿後まで、晝飯後四

絲捲

夢寐

十分の外休憩の時なく、宛然機械の如くに役せられたれども、アンデーは心に決する所あれば、少しも意とせず、熱心にその職務を行ひ、翌年は擢んでられて、汽罐の火夫となりぬ。こは、十三歳の少童に取りては、頗、大役なり。火の焚き方、水の注ぎ方、少しにても注意を懈らば、工場の大機械は忽ち調和を失ひて、微塵に破壊すべかりき。されば流石のアンデーも、全身の神経をこれに集めて、夢寐猶安んぜず、夜半俄に床より反ねおきて、汽罐の熱度計を視るの態をなししことも、稀ならざりき。

火夫の職も無事に務めて、翌十四歳の時、市の電信局の信使となれり。アンデーがこの時の喜悅は比するに物なし。

零碎

「地獄より極樂に轉じたる懷なりき」といへり。彼は信使たる傍、零碎の餘暇を利用して、電信の技術を學び、二年を経て、技手となりぬ。當時、米國全體の電信局中、單に耳によりて電文を解し得る者は、カーネギーの外に只一人のみなりきと。以て、その熟練せるを知るべし。翁がその立身の登龍門ともいふべき、スコットの會社と關係の縁を結びしは、この電信技手の時代なりき。

登龍門

慘憺

カーネギーが幼年時代に於ける、かゝる慘憺たる苦境の中にも、流石に多少の慰藉はなきにあらず。彼が母は、敬虔にして慈悲深き性なりしかば、蜜の如き甘き慰藉と、光の如き力ある奨勵とは、綿の如くに疲れて呼吸も絶えぬにて、

工場より歸り來るアンデーをして、翌朝は旭の如き希望を以て、勇み躍りて再び工場に駆け向はしめたり。

今一つの樂は、忙中の餘暇を讀書に費すことなりき。彼は幼少より、叔父に就いて讀書を學び、母にも奨められたれば、斯る苦業の中にも、讀書の樂を變ぜず。當時、市にアンダーソンといへる人あり。その藏書を無料にて借覽せしめしが、アンデーは最も熱心なる借覽者なりき。主人に對するカーネギーが深き感謝の念は、到底われ等の想像すべきにあらず。翁が今日その巨大なる寄附金の大部分を、圖書館に投ずるは、當時受けたる讀書の利益といふ深き印象と、一つは恩人アンダーソンの陰德を永く紀念する爲なりといへり。

藏書

陰德

困憊

業務に忠實熱心なることは、執業者の成功に、最も缺くべからざる事なれども、業務の餘暇を自己の進歩の爲に用ひざるものは、遂に大成功を遂ぐる能はず。カーネギーの如きは、困憊極りたる僅の時間をも利用して、進歩の原動力を貴き讀書に用ひたるものといふべし。(明治讀本)

### 二〇 紀州柑園

柑園皆據山、山腹磬石爲防、形如壘壁、種柑其中、其下亦倣之、層累相屬、以至平地。有田一郡、環以山草、每山皆然、或有種以枇杷者。紀柑聞於天下、甘柑之美、此郡爲第





創業者

たるの一斑を知るべし。然るに、この一大事業の創業者たるレセツプは、今なほ現存し、この功業を以て足れりとせず、更に進みて、夜々バナマ運河の事業に従事せりと。その志氣の堅忍不拔なる、感服の外なきなり。(船越松窓)

堅忍不拔

二二 羊罵狼

羊在屋背上、豺狼過其下、羊極口罵之。狼冷笑曰、怯夫敢然、抑罵我者、非汝也、汝所立之地位也。(中村正直)

二三 九重の山水

赤坂の御所に菊花を拜觀せるは、去年十一月二十四日な

横濱一絶青 横濱一絶青 横濱一絶青  
ハナハシ 12,491 100 横濱一絶青 17,875 100 横濱一絶青 13,480 100  
スエス 11,750 000 横濱一絶青 9,721 100 ハナハシ 9,721 100  
差 1,841 横濱一絶青 8,154 横濱一絶青 3,322

東宮職

り。昨日の雨は跡なく霽れて、天高く、氣澄み、風光大に人に佳なるの時なりき。

葎簀

先づ衛士に許されて表門を入れれば、御料局あり。又、門を入りて東宮職あり。次の門を過ぎて坂を下れば茶園あり。茂樹の間を通りて仙錦閣の前に出づ。清き池に橋あり、閣の横手に徑ありて、奥庭に通ふ栞とす。菊圃に通ふ間には紅楓あり。さゝやかなる流ありて、古りたる石橋を架せり。やがて第一の菊の園に入りぬ。花壇は三所に分れて葎簀の小屋をかけぬ。花は見頃は過ぎたれども、なほ七分の匂ありて、黄菊・白菊これとは驚かるゝもありき。そが中にも「御衣の黄」「賤機山」「新月の光」など忘れられぬ名なり。「糸



菊とて鳥の毛のやうなるがあり。猩々の髪振亂したるが如き、また神仙の髯の如きもあり。尙進むに、紅葉の夕日にかゝやきて、樹の間より見ゆるは、恰も美しき燭を點ぜるが如し。小川に落葉して、ちよろ／＼流に寂びたる橋をわたせる、燈籠の、雨に黒みたるなど、何たる風流ぞや。

又、松と楓との林を過ぎて、廣場に出てたり。道は山の麓につきて、古松に颯々の聲あり。池は平地にありて、斜に橋を見せたり。灣になれる一路は、山と水とに沿うて、竹の門を入りて、小高き丘に登る。道の兩側に熊笹生ひ茂りて、間々紅葉をあしらふ。こゝに若し狩衣召したる殿上人などおはせば、土佐繪の「蕙の細道の圖」はこれなるべし。

颯々

土佐繪

花壇

丘の上に洗心亭あり。その前に立ちて麓の方を見下せば、池には松と紅葉との影を蘸して、橋は虹の如く見ゆ。小徑を入れれば椿の植込ありて、花の地にこぼれたるさま、心地よし。また亭あり。こゝには五所に花壇の設あり。一番のに、「嵯峨の奥」などいへるがあり。二番のには「蘭麝」「花貝」「白髪」などいへるがあり。さて三番の花壇に植ゑられたる菊は、一莖に一輪の花をつけたるのみ。その名も「都の月」「あけの空」「延年」「初冠」「沖つ波」「大江山」「白玉」など、優しきが多し。花壇の蔭に進めば、笠松の大地に蟠れるがありて、丘の上の亭は眺望よし。立食の建物もこゝに設けられ、玉座の跡も残りたり。

玉座

陪觀

莊嚴

また前の花壇の處に戻れば、庭面に小菊を數多種彖込みて、その美しさ、花毛氈を敷きつめたるが如し。四番の花壇は、一株に千二三十輪の花をつけたる「儀宴の盃」「赤城」「雛鶴」など、その菊に相應しき名をつけたり。五番の花壇には、中菊の一枝に咲分の美しき花紅葉色々なるは、西の國の人なごの好む所なるべし。聚芳亭あり。實に花を眞中に聚めたる小亭、陪觀の榮を荷ひたる月卿、雲客の胸には、金光燦爛たる徽章つけて、此處に彼處に群れ居つ、君が代の千秋萬萬歳、天地と共に窮なき齡草の花を愛でたる、その日の如何に莊嚴なりしよ。

坂を下れば池の畔に出づ。橋あり。山の容、嵐山の倂あ

熊笹

微塵

後  
熊笹  
池

れば、麓の水に架せるを渡月橋と見立つるも面白かるべし。池に沿うてまた上り、鬱蒼たる松の林に入る。なほ進めば、寒香亭あり。前に後に梅の林ありて、樹に千古の苔青し。坂を下りてまた山路に入る。松は千歳の古木、紅葉は幾夜の霜に飽きて、赤きがあり、黄なるもあり。夕陽は木の間を洩れて、谿谷の熊笹をてらせば、名も知らぬ鳥の、梢馴れて長閑に語る様の妙なる、仙境とはこれなるべし。

こゝに、古き老木の根ばかりを残せるがあるに、案内する衛士に問へば、「これは、昔時、奥州街道の跡にして、それなる樹こそ、一里塚ならぬ」といふ。まことや、山の容、水の態など、自然のまゝにして、微塵も人工の痕をければ、こゝ一二町が間

は、京の中とは思はれじ。

やがて木の間に水見えたり。落葉搔く男の青草の上に  
憩ふも見えき。憾むらくは、林間に紅葉を焚くの衛士なく、  
われに石上に詩を題する能あらざりしを。

温室

行き行きて、丸山のお茶屋の前に出づ。また菊花壇あり。  
花の名に「御垣守」「井出の村雨」「柴舟」などいふがありて、その  
裏手には温室もあり。

反橋

斯くて園内を大方は見めぐりて、もとの仙錦閣の邊に出  
てぬ。この閣を「蓮池のお茶屋」ともいふは、池中に蓮の多き  
より呼んで通はしたる名なるべし。池に二つの橋あり。  
橋は白木の反橋にして、一橋渡り盡せば、路は山の腰をめぐ

幽静

る。水は鏡のやうに清くして、峰の松影を倒に映せば、山の  
根には舟捨てあり。次なる橋は、山と山と峙ちたる中の水  
に架りて、幽静なること形容するに辭なし。

また山と水とに送られて、もと來し路に戻り、ベンチに憩  
うて、夕日に映る紅葉の中に、楓林の晩を愛しつ、歸雲の山に  
入る景色、鳥の啼にかへる静けき態など見了りて、衛士に別  
れ、御所の門を辭して家路につきぬ。嘻、菊、われは爾の爲め  
に九重の御園に半日の清興を恣にしき。嘻、菊よ、われは爾  
のあるがために、少からぬ壽をかさぬるを得たりき。實に  
爾はわが爲の齡草よ。(大橋乙羽著、千山萬水)

二四 宮城

宮城周圍、繞以深濠、有櫻田半藏等諸門、二重橋爲正門、城內古松蒼鬱、瑞雲靉靄、可以見太平氣象矣。正殿、豐明殿、樓閣臺榭、隱現樹間、人民徘徊瞻望、有垂淚拜伏者、非無故也。城外平坦、細莎如茵、道路縱橫、有楠木中將銅像立焉。極偉觀也。宮城內外、置電燈數十基、煌若白晝。

(依田百川)

二五 船津翁の碑

老農  
近世三老農の中に就きて、技倆功績、最も優れたるは、船津傳次平翁なり。當時、學理未だ開けざりしかば、老農の稱あ

警醒

る者すら、徒に手加減と目分量との經驗を頼みとするのみなりしに、翁は痛く之を斥け、實驗に加ふるに、學理を以てし、大に農事の改良を唱へ、足跡全國に周からざる限なく、到る處、農民の迷夢を警醒し、我が國の農事をして、自ら刷新の運に向はしめき。かくて、翁が始めて世に知られしは、駒場農學校、則、今の農科大學の新設せられたる日なりき。蓋、農事改良の木鐸たるべき農學士は、大かた年齒なほ弱く、研究未だ至らで、實地に精しからねば、翁が指南を仰がざるもの非ざりけり。されば、學理、實驗、相和して、我國の農事を發達せしめたるは、翁の力とこそ謂ふべけれ。

木鐸

翁は、幼名を市藏と云ひ、天保三年十月一日、上野國勢多郡

弱冠

富士見村大字原之郷に生れたり。其先は、甲斐國の武田の家臣なりしが、後、上野に移り、世々、農を治めて、翁に至れり。翁の父は俳諧を善くし、白庵と號し、午麥と稱せり。翁は父の教訓を守り、弱冠より、躬ら犁鋤を搦りて、月を踏み、星を戴きて、力耕を事とせり。

皆傳

抑、翁の父は、多く田園を兼併することを誠められたるまゝに、翁は、數頃の小圃を耕耘し、敢て怠らざりき。其餘暇には、父に請ひて、和漢の學と數理とを修めぬ。就中數學は、其蘊奥を窮め、遂に關流の皆傳を受く。翁が世の老農と異なるは、其根底實にこゝにあり。翁が常に數理を應用して、裨益すること多かりしも、また宜なるかな。

桃李の下自ら蹊を成す

揄揚

翁又俳諧を好み、冬扇と號し、俗調にも通ぜしかば、山田守る賤が男をも感化する便を得たり。翁が多才なる、率ねかくの如きものあり。翁は、躬ら求むるにあらねど、桃李の下いかでか蹊をなさざらん。名聲漸く揚り、大物代名主たらんことを請ふものありしかども、翁は、剃髮して避けぬ。されど、尙免れ得て、遂に假髮をつけて、職に就くに至れり。其間、治績顯著なりしかば、村民今に至るまで、尙、德澤を仰げり。時の大久保内務卿、翁の名を聞きて、親しく囑するに、駒場農學校農場監督の事を以てし、且、廣く日本全國の農事を改良する事を任とせよとて、揄揚極めて懇篤なりしかば、翁感憤、遂に出でて仕へぬ。實に明治十年の冬にて、翁が四十有六

歳の時なりき。駒場の野、素より惡草彌蔓し、地味また薄かりしかば、其開墾は、極めて困難なりしかど、翁の技倆と熱心とは、終に荒野を化して、熟圃となしぬ。翁が心神を勞せしは、

駒場野や開き残り、に轡蟲。

の吟あるにて知りぬべし。後、農商務省に入り、更に農事試験場に轉じ、累進して技師に任ぜられ、高等官六等に至れり。正七位に叙し、藍綬章を賜ひて、其功を表せられぬ。既にして、年老い、郷に歸り、尙、農圃の間に周旋したりしが、やがて、病にて逝きぬ。時は、實に明治三十一年六月十五日、齡は六十有六歳なりき。

枯枝に鳥を  
熟圃  
は、終に荒野を化して、熟圃となしぬ。

藍綬章  
紅綬章  
孝子  
孝女  
孝孫  
孝孫

藍綬章  
紅綬章  
孝子  
孝女  
孝孫  
孝孫

翁、天資勤勉にして、業に倦まず、勞を厭はず。其の堪能なるは、獨、農蠶の道のみならず、花卉盆栽、割烹の末技に至るまで、能く精通せり。その講話は、筆記、又は印刷したるものすら、東西相傳へ、南北相争ひて、家寶とすれども、其既刊の著書は、僅に「稻作小言」、「里芋作法」、「韭栽培法及び効用」、「直棗歩刈用法」等、三四の小著あるのみ。翁の遺稿、豈、これのみならんや。翁、性温厚にして、功に誇らず、人と争ふことなかりしかば、遠近、逝去を悼まざる者なく、其高德を慕ひ、其偉績を仰ぎ、碑を建て、不朽に傳へんと、有志等余に文を請ふ。余、翁との交深く、有志の意、また、獨、翁に私するにあらざるを知る。嗚呼、學理の深遠なるも、之を實地に應用せずば、何の功か

逝去

參照

諄々

あらん。實驗の重要なるも、之を學理に參照せずば、何の益かあらん。學理・實驗、相待ちてこそ、眞の農事は進むべけれ。翁が諄々としてかの農民を誘導し、孜孜としてこの木鐸を指南し、かくて能く調和するに至らしめしは、實に翁の功勳なり。況して翁の著書悉く世に出てなば、翁は逝くとも、其志や千載の鏡とならん。是、余が喜びて、有志の請を諾せし所以なり。(品川彌二郎)

二六 山林

木材皆取之於山林、建家屋、架橋梁、作舟車、以至日用

器具薪炭莫不皆然。不獨此也、其利所旁及、亦有甚大者。森林能平和氣候、故入林中、夏時常涼、冬時常暖、又能媒降雨、養水源、故樹林繁茂、則降雨順、時夏時少、涸渴如山、中無森林、方夏時降雨、流出土砂、洪水氾濫、近時各地多是害者、濫伐林樹之所致也。(重野安釋)

二七 沙漠の旅行

千八百五十年七月十四日、予等の一行は、亞刺比亞の沙漠を進行せり。前途一望千里。唯一奇峰の、眼前に聳ゆるあるのみ。土人は、此山を魔神の住する處とし、固く登山を禁ぜり。故に、今予とオーヴェル、ウエークと、此の山に登らん

魔神

彫像銘記

とするに當り、土人は、頻にこれを留めしかど、その忠告は却つて予等が望を盛んならしめたり。何となれば、予は、魔神の住する處と聞き、山上に必ず古廟などありて、古き彫像銘記等を發見し得べき望ありとなし、オーヴェル、ウエークは、地質學の研究に屈強なりと思ひたればなり。此夕、予等の一行は、一の泉源地に達して、此處に露營せり。

拂曉  
棗子

其翌、拂曉、予は、登山の準備を整へ、水筒、麵麩、及び棗子を携へ、單身にて出發せり。予は、初め案内者を求めたれど、一人として應ずる者なかりしが、オーヴェル、ウエークは、幸にも一僕を得、予に次ぎて、別路より登れり。此日、他の人々は、次の泉源地にて、露營を進むる筈なれば、予は、山より直に、その

燧石

燧石の跡は、山頂にあり、  
石の散布せる平原にして、  
歩行頗る困難なりしが、  
予は、益進みて前途を望むに、  
山の距離は、思ひしより  
遠かりき。

蹄鐵狀

地に到るべきこと、せり。予の取りし道は、沙土若くは燧石の散布せる平原にして、歩行頗る困難なりしが、予は、益進みて前途を望むに、山の距離は、思ひしより遠かりき。且、最初は、山の蹄鐵狀なるを知らざりしかば、其中央に向ひて、只管進みゆきしに、漸く近づくに及びて、予が目ざし、處は、最も遠隔せる處なりしことを悟りしかば、これより山の一端に向ひて歩を轉じ、一の丘陵を越え、深谷を涉りて、先づ山の前岸に攀ぢ登りたり。

斯て予は、辛くして、蹄鐵狀の一端なる斷峰に登りしが、夜來、夢中に往來せし、彫像銘記等は、其影だになく、又、土人の言ひし魔王の宮殿もあらざりけり。予は、疲勞と失望とに加



惘然

ふるに、歸路の覺束なき憂を以てし、惘然として暫く山上に息ひしが、麵包棗子等を取り出すべき勇氣もなく、僅に水筒の水の以て、燃ゆるが如き渴を醫したるのみ。予は、露營の人々が既に予を前進せるものと推察して、他處に移らんことを慮り、早く元の地に歸らんと、勇を鼓して、山の一角を下り、午時過ぐる頃、遂に谷底に達し、顧みて、暫時、此怪峰に名残を惜み、歸途に就かんとして、始めて方角を失へるに驚けり。よりて、一沙丘に登りて、四方の谷間を見渡すに、絶えて生物なく、一の天幕をだに見出すこと能はざりき。予は、如何にもして、一行の人々に、予が所在を知らしめんと、携へたる短銃を發したれども、更に應ずる者なかりき。よりて、再び一

歡天喜地

丘に登りて發せしかど、尙、答報を得ること能はざりき。

予は、唯茫然として、四邊を顧みしが、幸なるかな、近き樹蔭に、一の草屋あるを發見せり。予は歡天喜地、一散に走り入りしに、何んぞ圖らん、こは人の住み捨てたる跡ならんとは。予は是に至りて、氣力も盡き果て、地上に坐したる儘、前面の谷間を眺め、萬一、一行の人々を見あつることもやと、一縷の望を繋ぎ居たりしに、果然、一行の駱駝の、遙に過ぎ行くを認めたり。驚き、且、喜びて、再び注視すれば、是所謂幻影なりき。亞刺比亞人が、沙漠中に魔神ありて、孤行の旅客を誘惑することありと思へるも、亦、この幻影より妄想を起せるものならん。

幻影

妄想

閃々

かくて、日漸く傾きしかば、予は、彼の樹陰に、露營せざるを得ざりき。予、もし茲に火を焚きしならば、或は一行の人々に、予の所在を知らしむる便宜ともなりけんを、最早枯木を拾ふべき勇氣もなければ、殆ど自失して、樹陰に打ち倒れぬ。二時間程を経て、日は全く暮れぬ。時に予は、試みに頭を擡げしに、南方の谷間に、火光閃々たるを見たりき。さては、友人等の、予を尋ぬるならんと、俄に勇氣を鼓舞し、起ちて短銃を放ち、其響の谷間に傳ひ行くを見送りつゝ、耳を側て、答銃を待てり。然るに、四方闐として、更に聲なく、唯炎焰の高く天を焦すを見るのみ。姑くして、予は再び一發を試みしが、遂に應ずるものなく、今は運を天に任せて打ち臥したり。

轉輾

裝填

されど發熱の爲め、心神惱亂し、終夜、地上に轉輾しつゝ、望あるが如く又恐るべきが如き、白日の來るを待てり。既にして夜は全く明け離れしが、四圍寂寞として、天地死せるが如し。予は、今、最後の一報を旅友に試みんと、多量の彈藥を裝填して、二回連發し、此の響は、死人をも起たしむべしと期したりしに、無慙なるかな、寂寞は更に寂寞を増すのみ。時に日は既に高く昇り、暑氣益甚しく、しかも予が蔭と頼みし老樹は、一片の葉もあらざりければ、僅に枯枝の蔭を逐ひつゝ、幹を廻りて打ち臥したれど、亭午の頃には、あはれ、それさへも仇なりき。予は、此時渴に迫り、身を刺して、己が血を啜りしが、後には知覺を失ひて、唯、夢幻の間に在りき。

驚喜

かくて、太陽全く山に入りし後、再、我に反り、漸く眼を開きて見まはす時しも、一聲高く耳を貫けるは、駱駝の叫なりき。予が驚きて、身を起せるとき、あたりに眼を注ぎつゝ、近づき來る一人の土人あり。予は、嬉しさに堪へず、幽なる聲もて、「水を水をとひひしが、彼が「唯唯」との答を得し時の驚喜は、實に喩ふるに物なかりき。彼は予が傍に來り、先づ予が頭に水を灑ぎて靜に介抱せり

薄暮

さて、予が沙漠中に迷ひしより、露營に残りし人々、大にこれを憂ひ、殊にオーヴェル、ウエークは、かの日、薄暮に歸營して、予の未だ歸らざることを聞き、其夜、直に數人を伴ひて、四方を搜索せり。彼は、又次の日、人を二隊に分ちて、遍く尋ね

泪

廻り、漸く予が足跡を見出しぬ。されど、此沙漠に迷ひて、日光に照さるゝこと十二時間を過ぐれば、必、死す」とは、土人等の常に言ふ處にして、予が生存せんことは、殆ど望なき所なれども、尙、賞金五十弗を懸けて、百方を搜索せしに、一人の土人、先に見いだせる足跡を追求し、進みて石地に至り、その跡を失ひたり。されど、予のまさしく近傍にあるべきを信じ、駱駝をして、高く叫ばしめ、以て予を勵まさんとしたるなりと。それより、意を注ぎて予を介抱し、伴へる駱駝に乗せて、露營に連れ歸れり。

嗚呼、予が旅友に再會せしときの喜は、そも如何ばかりなりしぞ。予は、泪ながらに、諸友の厚誼を謝せり。かくて予

は、三日の間營養を加へし後、一行の人々と共に、再び進行することを得たりき。(尺秀三郎譯、ハーバルト旅行日記)

二八 佐藤信淵

佐藤信淵、出羽國人。家世業醫數世。祖歡庵、抱洽欲救斯民之志、乃修農業學。嘗爲會津侯開漆園、以製漆。會津漆器、稱于此。自歡庵子元庵、四世之間、繼承遺業、而至信淵、大成家業、其名大顯。信淵少有經世之志、寬政文化間、漫遊四方、到處察人情風俗、驗氣候地質、探產物、屢見諸侯、說殖產興業之利、或講牧畜耕作之改良法、或開墾山

野、以利公衆、其功績顯著、世人景慕之。

二九 モセス、ロスチャイルド

吝嗇

十八世紀のはじめ、佛蘭西革命のありしとき、獨逸のフランクホルトといへる町に、モセス、ロスチャイルドと呼べる猶太人住みけり。元來猶太人といへば、吝嗇なる人種として、世に輕侮せらるゝものなれど、彼は銀行業を營み、あまり大家にはあらざりしが、至つて評判のよき人なりき。當時佛蘭西の軍勢、獨逸に攻め入り、國中の騷亂一方ならず、ヘッセ、カッセルの君も、遂に自國を出奔するに至りぬ。この時、豫て貯へ置きし大金、并に貴重の寶物など、あまた残したれば、

騷亂

敵に奪はれんことを恐れ、たま／＼フランクホルトを通過せる時、ロスチャイルドの家に立寄り、「これらを預り呉れよ」と頼みぬ。時も時としてロスチャイルドは迷惑に思ひ、一度は辭したれど、君が失望せる有様の、いたく氣の毒に感ぜられければ、とにかく預ることのみは承諾せり。さはれ、かゝる危険の時として、この大金を全うして預り置くべき見込もなければ、預りの手形のみは、辭して渡さざりき。

かくて、彼は右の大金と寶物とを併せ、その價格數十萬ポンドの品をフランクホルトへ運び來れり。然るに、恰も佛蘭西の兵は、既にこの地へ攻め入り來りければ、彼は急ぎその品々を庭の隅に埋めかくし、己が六千ポンドほどの財産

分捕

は、一錢だも手にふれず、そのま／＼になし置き、敵の分捕するがま／＼に任せたり。

詮索

この時にして、彼、若、敵を欺き、貯の金子は一錢もあらずなどとして、自分の金をも隠しなば、敵は家の内を詮索して、預りの品々をも合せ奪ひ去りしならん。さはれ、身分相應の財産を、悉く投げ出し、ため、敵も、尙、別に大金のあらんとは思はずして去れり。

佛蘭西の軍勢引拂ひし後、彼は、最早、己の資産を失ひたれば、乃、埋めし預金を掘り出し、その一部を以て資金にかり、再、營業を勵み、忽、以前の財を回復せり。

かくて數年の後、天下泰平に歸し、ヘッセ、カッセルの君も

内心

その本國に歸り來ぬ。されば、ヘスメの君は、その由を直にロスチャイルドへ通知せんと思ひしが、考ふれば、豫て預けし金銀・寶物は、よし佛軍に奪はれずとも、彼の心一つにて奪れたりといはるゝも、詮方なき事なりと、内心安からず思ひ居たりき。然るに、豈計らんや、此方より何事も申送らぬに、ロスチャイルドの方より、預りの品々は都て無難なり。金子には一箇年五分の利子を附け、今日にも返納せんとの旨併せてそれを保管せる始末を告げ、并に辭りもせず、その一部分を流用して資本とせし次第を、陳謝し來れり。かくと聞ける君は、且驚き、且悦び、深くかれの正直なるを信じ、金はそのまゝ安き利子にて預け置き、尙己が感謝の情を表せんが

陳謝

推舉

和睦

ため、歐羅巴諸國の帝國に、その正中なる次第を説き、金銀の用達に推舉せり。これより、ロスチャイルドは諸國の王家に出入して、大金の取引をなし、俄に巨萬の富を致しぬ。

そののち、歐羅巴の三大都會といはれし、ロンドン・パリ・キンナへ、三人の子を分居せしめ、同じ業を開設せしめしが、何れも日にく々繁榮し、世界に比類なき富貴の身となれり。而して、そのロンドンに開店せしものゝ如きは、七百萬ポンドの財産をのこし、他の二人も、大率同じ財産にて貴族の位に昇れりとぞ。

人はいふ、今ロスチャイルド一家の富あらば、よく諸國の帝王をして師を起さしめ得べく、又和睦せしめ得べしと。

げに其大家なること思ふに餘あり。然るに彼等がこの大  
家を起し、由來はたゞ人の依頼を受けて、信實を盡したる  
正直の徳に基けるなり。

三〇 愛財甚

君子棄其財而救貧窮者、非不愛其財、愛其財甚而欲  
用之徳義也。故能賑恤貧窮者、視其平生用財、必儉約不  
妄費之士也。不能救貧窮者、必驕奢妄費之人也。

(貝原篤信)

三一 赤十字社 (その一)

創傷

軍人の戦に臨み、命を鴻毛の輕きに比して相闘ふは、敵と  
なく身方となく、各、その君主の命を奉じ、國家の爲にするも  
のにして、敢て、一人一個の怨あるにあらず。故に、その創傷、  
疾病によりて、戦ふこと能はざるに到れば、敵もなく、身方も  
なく、四海兄弟、萬國朋友の誼によりて、相憐み相救ふは、人の  
情なり。いはんや、各、その君國のために身命を捧げたる忠  
臣義士なるをや。この惻隱の心を實行するを、赤十字社の  
主旨とす。

惻隱

こゝに、赤十字社の由來を尋ぬるに、今を去ること、約そ、五  
十年前、わが嘉永、安政のころにあたり、英佛二國聯合して、露  
國を攻めしことあり。これをクリミヤの戦争といふ。こ

填塞

委棄

の時、聯合軍は十八萬人、露軍は二十萬人にして、最近、百年間に於ける著名の大戦なりき。且氣候も不順にして、疫病流行し、傷者、病者、舍營と軍艦とに填塞し、無数の死屍、山野、波浪に委棄せられ、その慘狀、實に、見るに忍びざりき。

この時、英國の貴婦人に、フロレンス、ナイチンゲール嬢といへるあり。この人、慈善の心深く、且、義勇の念に富み、少時より看護學を修め、病者の取扱に熟したり。こゝに於て、決然、旅装を整へ、遠く、戦地に行きて、病者を救護せんことを公言せしに、この義舉を聞き、奮つてこれに従ふもの、頗る多く、遂に一の救護團を成し、遙にクリミヤに行きて、夥多の患者を救療せしに、その恵に浴したるもの、數を知らず。皆悦び

救療

てその恩を稱せり。これぞやがて、赤十字事業の基とはなりにける。

この戦收りて後、幾ばくもなく、わが安政六年、澳國と佛國との間に大戦争ありき。この時、瑞西國の人、ヘンリー、ジュナント氏、戦況視察のため戦地に出張したるに、六月二十四日のソルフエリノの戦には、三十萬の大兵、激戦十五時間に亙り、死傷、山野に満ち、その慘狀、實に言語に絶えたり。こゝにおいて、氏は、ソルフエリノの紀念と題せる冊子を著して、救護會社を興さざるべからざることを天下に訴へ、而して、種々の障礙を排して、わが文久三年、僅に同志五人と共に社務を創設したるに、徳、孤ならずして、各國の國使、有志者等、陸

障礙



締盟

續と會同し、翌年、即、わが元治元年八月には、條約十條を議決し、十一箇國の政府、これと締盟するに至れり。即、締盟政府は、この救護事業を保護し、交戦國の人といへども、救護者なる時は、決して、これを俘にし、又は、害を加ふべからざる等の事を締約せり。而して、この會盟は、瑞西の都ジエネバにて締結せられたるを以て、徽章はいづれの國にも偏らず、瑞西國旗の赤地白十字をうつして、白地赤十字を用ふるに至りき。因つて、この條約を赤十字條約といひ、この事業を赤十字事業と稱し、赤十字社中央社をジエネバに置き、各國赤十字社の連絡を通じたり。世界に於ける赤十字社の由來は、即、かくの如し。

徽章

三二 赤十字社 (その二)

本邦に於て、この事業を促し、は、明治十年西南の役なり。この役には、死傷者の數、甚、多かりしかば、時の元老院議官佐野常民、大給恒の二氏、これを傷み、歐洲赤十字社の組織を參酌して急に、一の救護會社を設立し、これを博愛社と名づけ、大總督府の認可を得て、彼我の傷者病者を救療せり。海内の有志者、これを聞き、協賛、寄附するもの、頗る多く、聖上、この舉を嘉し、特に、金壹千圓を賜ひて、これを獎勵し給ひき。亂、平ぎて後、博愛社は、その基礎を確定し、これを永遠に維持せんがため、廣く社員を募りて、その組織を固くせんとせり。

參酌

協賛

認可

時に 皇后陛下にも、特にこれを嘉し給ひ、年々金參百圓を賜ひたり。明治十九年、更にジエネバ赤十字條約に加盟せり。こゝに於て、その翌年、博愛社は、政府の認可を経て日本赤十字社と改稱し、ジエネバ中央社の公認を得たり。因つて、更に、諸般の規模を改定し、天皇、皇后兩陛下の至貴、至尊なる保護の下に立たんことを奏請せしに、忝くも、これを聽納したまひ、また、年々金五千圓を下し賜へり。かくして日本赤十字社は、兩陛下眷護の下に立ち、軍陣衛生の整備に適應せんがため、宮内省及び陸海軍省の監督を受けて、その事務を執れり。

眷護

この事業たる、實に、慈善の、最高大なるものなるのを以て

優渥

皇后陛下は特にこれを獎勵したまひ、その總會には、毎歲、臨御あらせられ、屢、優渥なる令旨を賜へり。

日本赤十字社病院は、東京澁谷村第二御料地にあり。明治二十一年、皇后陛下、特に金十萬圓を賜ひて、新設せしめ給ひしものなり。

誘掖

社中、また篤志看護婦人會あり。故陸軍大將熾仁親王殿下の誘掖に出で、皇族をはじめとして、華族その他、有志の婦人相集りて、看護法を實修せり。平時に於て博愛の主義を擴め、救護の事務を練習せしめんがために、臨時天災の負傷者を救護するを以て、この社の一事業とせり。かの盤梯山の破裂、土耳其古軍艦の沈没、濃尾の震災、三陸地方の海嘯等に

あたり、救護の敏捷懇篤なりしは、普く世人の知る事なり。

明治二十七八年の戦役には、日本赤十字社は、直に支那朝鮮・臺灣の各地に救護隊を派遣し、また廣島・大阪・東京等の陸軍豫備病院において、彼我の傷者・病者を救療し、或は、運送船内の救護に服務し、或は出師の途次に、社員を派して軍人を犒ふ等、細大の事、皆、嚴格なる軍令の下にありて、善く其任務を盡せり。篤志看護婦人會は、故陸軍大將彰仁親王妃殿下、幹事長の資格を以て、豫備病院を巡視慰問し給ひ、會員たる貴婦人は赤十字の看護服を著けて、看護の勞を親らせり。皇后陛下には、畏多くも醫官に下問し給ひて、その奏上のまゝに、白色の消毒衣をめさせられ、宮中の一室において、女

繙帶

官を督し、親ら繙帶を製して負傷者に賜ひ、又、眼を失ひ、足を失ひしものには、彼我の別なく、義眼・義足を賜へり。しかのみならず、廣島に行啓ましく、豫備病院に臨御し、親しく彼我兵士の容體を慰問し給ひぬ。かく慈仁なる陛下の誘掖・奨勵し給へる赤十字社なれば、その熱心懇篤なるも、まことに故あるなり。

日清の戦やみて、更に、北清の役起れり。この時は、各國の軍兵、聯合して支那を攻め、死傷いと多かりしが、わが赤十字社は、直に、また、救護隊を遣して十分に任務をつくしき。その病院船・博愛丸に護送せられて、廣島にきたりける外國兵のうちには、感涙にむせびし者さへありけりといふ。戦やむ

勳章

に及びて、外國の政府はその功を賞して、わが赤十字社の重立ちたる人々に、勳章を送りこせり。あはれ、わが赤十字社の名譽は、こゝにいたりて、世界に飛揚せりといふべきにあらずや。

これらの戰役、既に、和平の局を結び、救護隊歸朝しければ、その都度、朝廷、特に、その功を録し、敍勳、賜金等、各、差ありき。そも、各國の例を按ずるに、これよりさき、君主の赤十字社員に對して、賞を行ひたる例は、いまだあらざりしなり。これに由りて觀れば、わが國にては、君臣上下、共に、この事業に熱心なること、遠く萬國に秀てたり。藍より出でて、藍より青しとは、これをやいふべからむ。(武島又次郎)

三三 特用食物

穀類・野菜・果物等、食料となるべき植物の外、吾人の生活に缺くべからざるものを特用植物といふ。

特用植物は、その數、枚舉に遑あらずといへども、そのうち最、普通なるものを、草綿・大麻・藍・紅花・甘蔗・煙草・漆・桑・楮等とす。草綿は衣服の原料を採る植物にして、その需要、甚、廣し。草綿の種子には柔なる毛を有す。これ吾人の綿と稱するものなり。

草綿は、晩春に種子を下し、夏、花を開く。五瓣にして、その色、淡黄なり。果實は、桃子に似、秋に至りて熟し、果皮自ら裂

晩春

枚舉

けて綿を吐く。商工業上にて綿花と稱するは、この綿より種子を取り去りたるものゝことなり。

大麻は春種子を下し、夏に至りて熟す。その莖は眞直にして、高さ七八尺に達す。花には、淡綠色に白色を交へ紅條あるものと、綠色にして恰も葉の如きものとの二種あり。前者は雄花にして後者は雌花なり。雄本の大麻は雌本の大麻より高く生長すれども、實を結ばず。雌本には、小にして灰黑色なる實を結ぶ。

纖維

大麻は、莖皮を剥ぎて麻となし、繩、綱等を製し、又、絲に紡ぎ布に織る等、用途頗る廣し。下野の産、最、名あり。亞麻および苧麻カラムシも、亦、莖皮を剥ぎ取り、その纖維を布に織ることを得

べし。世にリンネルと稱する織物は、亞麻の纖維にて織りたるものにして、越後縮薩摩上布等は、苧麻の纖維にて織りたるものなり。

紅暈

藍は、莖葉共にほゞ蓼に似たり。花の形は鐘に似て、縁五つに裂け、その色、白に紅暈を帶ぶ。春種を蒔き、苗の長さ五六寸に及ぶ時、これを田或は畑に移植し、秋に至りて刈り取る。第一回到り刈り取りたるを一番藍といふ。その後、刈株より芽を出して成長す。これを二番藍といふ。藍の葉は、刈り取りたる後、刻みて日光に晒し、搗きて塊となし、染料に供す。これを藍玉といふ。阿波の産、最、名あり。

紅花は、秋、種子を下し、翌年の夏に至りて發生す。花は、そ

五裂

陰乾

の形細筒状にして、末五裂し、その色黄赤なり。葉は細長くして縁に刺あり。花を摘み、刻みて白に入れ、搗きて清水に浸し、絞りにて陰乾となし、後、紅に製するなり。

甘蔗はもと熱帯植物にして、性寒を忌むが故、北海道は勿論、東山・北陸兩道には適せず。その形状は、ほゞ玉蜀黍の如し。甘蔗を栽培するに二法あり。一は、年々同じ切株より新芽を生ぜしめ、別に苗を仕立つる手数を要せざる法なり。冬日たえて霜雪なき地方にては、多くこの法を用ふ。一は肥えたる莖を切り取りて砂の中に埋め置き、翌年の春堀り出し、これを畑に植うる法なり。東海道の如きは、是非ともこの法に従はざるを得ざるなり。

壓搾

砂糖を製するには、この草の莖を壓搾して、十分液汁を取り、釜に入れて煮つむること數時間の後、冷して凝結せしむるなり。吾人の日常用ふる砂糖は、多く、かくして製したるものなれども、舶來品中には、まゝ甜菜もしくは槭樹の一種より製したるものあり。

煙草は、春、種子を下し、夏に至りて花を開く。その形、漏斗に似たり。葉は通例楕圓にして、末尖り、甚、大なり。元來アメリカ洲の産なれども、今は世界の各國に培養せらる。わが國にては、薩摩・大隅・肥前・周防・常陸等の産、最、名あり。

煙草の葉は、採りて陰乾となし、細かに刻み、或は巻きて吸煙の料となす。

扁圓

煙草は元來有害なるものなれば、務めてこれを節するを宜しとす。殊に少年にありては、その害最甚し。これ國法をもつて少年の吸煙を禁ずる所以なり。

漆樹は複葉を有し、その花は小にして黄白色なり。實は扁圓にして黄褐色を帶ぶ。性寒を好み、又濕地を好む。樹皮を傷け、その液汁を採りて漆に製す。實は搾りて蠟を取ること櫛に同じ。材は水に堪ふるをもつて、水をかぶるところに用ひて宜し。

漆は種々の器具に塗りて、その質を堅固にし、且美麗ならしむ。漆器はわが國の名産にして、外國人の常に稱賛するところなり。下野・岩代の産を、最佳品とす。

肥瘠

桑は砂地に適し、土地の寒暖を選ばずよく繁茂す。養蠶に缺くべからざること、皆人の知るところなり。その樹皮は紙に製すべく、その材は火鉢・煙草盆・書架等に作るべし。桑を繁殖するには、挿木・壓條等數法あれども、最多く行はるゝは壓條なり。壓條の一種に、笠取とて枝を四方に枉げて地に達せしめ、その一部より根の生ずるを待つてたち切り、これを移植する法あり。これ最も良き法なり。されど挿木の一種なる箕伏も、亦熟練なる農夫の手には頗る便利なる法なりとす。楮は、その花葉ともに、ほゞ桑に似たり。この植物は土性を選ばず、肥瘠共によく生長す。往々山林・原野に自生する

園圃

ものあれど、多くは園圃に栽培す。春、根際より數多の嫩條を出さしめ、秋に及びて刈り取り、幹皮を剥ぎて紙に製す。紙となる植物は多けれども、この樹をもつて最良とす。

三四 少年に寄語す

凡、天下の事、無責任の慷慨より容易なるはなし。人、おのれに背き、事、意の如くならざれば、輒ち嘲罵を以て自ら遣る。名は慷慨と稱し、義憤といふも、實は、即、不平のみ。多くの場合においては、陋劣なる主我的感情より來る所の不平のみ。是の如き「慷慨」又は「義憤」の幾百千を積聚するも、徒に世を亂り人を誤るの外、世道人心に何程の裨益かあらん。眞に世

救濟

を憂ふるものは、徒に慷慨して已むべきにあらず。世、豈、戰を宣告して而して逃避するものあらんや。吾人は救濟の方法を解せずして、徒に慷慨を事とするもの、果して眞に憂世の士なりや否やを疑ふ者也。

近事新聞雜誌に現はれたる所によりて、今の少年社會の風氣を察するに、その最著しき現象の一は、慷慨を喜ぶ事なり。吾人深く是を憂とす。

彼等口を開けば輒ちいふ、「人は墮落せり、世は腐敗せり、名教地に落ち、彝倫蕩然たり、一大革新なかるべからず」と。言や壯ならざるにあらず、吾人希くは少年諸子と共に、現世の腐敗を承認せん、唯、少年諸子にして是を言ふ、果して可なら

彝倫



閱歷

ん乎。吾人は慷慨其物を悪しと謂はず、心の清き者は偽善を悪まざるを得ず、人の正しきを好むものは、不義を憤らざるを得ず、慷慨義憤は、人情の最麗はしき發動として、吾人は少年諸氏に見たるを喜ぶ。唯、其位に居らざれば其事を言はず、吾人は少年の本領他にありて此に在らざるを告げんと欲す。

少年の時代は修養の時代なり、學識を蓄へ、閱歷を積み、品性を養ふ時代なり。彼は道德上に於ても、法律上に於ても、一個人たるの責任を有せざるなり、一個人の責を有せざるは、即、天の假貸せる修養の時代なればなり。彼は實務の人にあらず、社會の人にあらず、所謂部屋住の人なり。他日、實

私淑

退嬰

務の人、社會の人としての、完全なる資格を得んがための準備時代なり。青春幾時ぞ、彼は是の準備の爲に、當に、日も尙足らざるべし。何の違ありてか、慷慨者流の空言に私淑して、其本領を顧みざらんとはする。社會は少年の慷慨によりて、毫も益を受くるものにあらず、少年自らは却つて是が爲に大損害を蒙らん。かへすがへすも心得違といはざるべからず。

快潤、樂天、進取は少年の生命なり。完全なる人生の開發は、是の生命ありて初めて望み得べけん。不健全なる慷慨は、動もすれば人を憂鬱にし、退嬰にし、厭世にす。是の如きは少年にありては、すなはち精神的に死せるなり。吾人、最

是を恐る。(高山林次郎)

明治實業讀本卷の三終

明治四十二年二月十九日印刷  
明治四十二年二月廿二日發行  
明治四十二年三月二十日再版發行

明治實業讀本全八册

定價金貳拾五錢



著者

中村康之助

發行者

泉屋清次郎

印刷者

森山章之丞

印刷所

青木弘



發兌

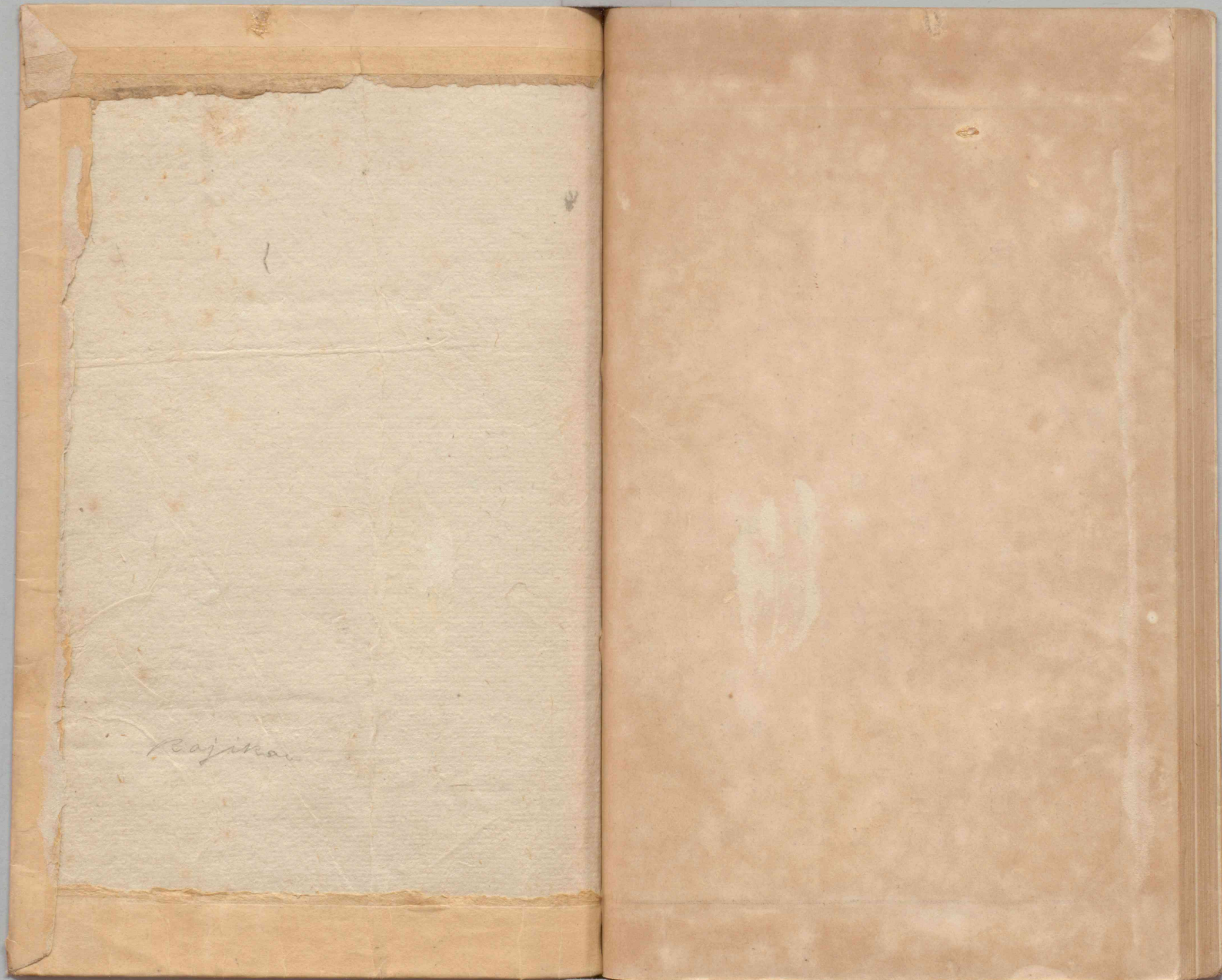
東京市神田區表神保町二番地  
電話本局四三三七 一五三三  
振替貯金口座 一三三九五

同文館

大賣捌

東京神田 東京堂  
大阪東區 寶文館  
東京牛込 同文館支店  
韓國京城 日韓書房





Kajika

広島大学図書

2000054289

